

国際ロータリー第2560地区  
ガバナーテーマ

「基本を学び、地域と共に」

高田ロータリー今年の  
スローガン

「ロータリーを識り、  
奉仕を实践し友情を深めよう」



人類に  
奉仕する  
ロータリー

2016～2017年度

国際ロータリー会長 ジョンF.ジャーム

2560地区ガバナー 田中 政春

高田ロータリー会長 本山 秀樹

幹事 中田 正

事務局：新潟県上越市西城町2-10-25 大島ビル201号

TEL (025) 526-3288 FAX (025) 526-3534

メールアドレス：takadarc@joetsu.ne.jp

例会場：デュオ・セレッソ TEL (025) 526-3111

クラブ広報・会報・雑誌委員

加藤 卓也 伴 長門 斉藤 光雄 佐藤 芳徳

## 第41回例会 ■ 5月12日(金)

No.40

### 会長挨拶 ● 本山 秀樹



春の大型連休はいかがお過ごしでしたでしょうか。私は、糸魚川の月見不池のフジと月華山かねこつつじ園に行ってきました。かねこつつじ園は初めてでしたが、個人の庭に3,500本のツツジが植えられ、まだ早く五分咲き位でしたが、見ごたえがありました。山の上からの日本海と糸魚川の街並みも綺麗でした。

さて、ロータリーでは5月は「青少年奉仕」月間です。2013年規定審議会で「新世代奉仕」から「青少年奉仕」に名称変更され、現在、国際ロータリー奉仕の第5部門「青少年奉仕」になりました。

「青少年奉仕」部門では、インターアクト・ローターアクト・ライラ・青少年交換の各プログラムが実施されています。12歳から30歳までの若人を対象に年齢別・プログラム別にテーマを設けることで青少年の健全育成を図り、国際社会・地域社会更にはロータリアンのリーダーに育成し、平和でより良い幸福な未来を築くことを支援するロータリーでもっとも重要な奉仕の一つです。

また、14日には新潟市で2017-2018年度の地区協議会が開かれます。いよいよ新年度が始動します。橋詰次期会長には地区協議会を楽しんできて頂きたいと思います。

### 出席報告

出席率 98.11%

### 委員会報告

出席・ニコニコBOX委員会

小林 元君——誕生日と例会が重なりました。

大島 誠君——4月28日観光庁から百年料亭ネットワークが「日本のテーマ別観光」に選ばれました。全国の百年料亭の皆様と新しい観光を生み出します。

伴 長門君——雪上で転び足の骨を折ってしまい、その際にはお見舞いを頂きましてありがとうございました。やっとクラブにも出席させて頂けるまでになりました。

親睦委員会——5月の会員お誕生日・各お祝い

橋詰会長エレクト——5月14日地区研修協議会

について・会員満足度アンケート結果について

米山奨学委員会——寄付のお願い

### 会員インフォメーション

伴 長門君——お見舞の御礼

### 幹事報告

配布物：週報No.39・40

回覧物：ガバナー月信5月号

## 卓話

# 高田ローターアクトクラブ主催観桜会を振り返る



高田ローターアクトクラブ 会長 布施 修治 君

こんにちは。高田 RAC 会長の布施です。今期も残すところあと2ヶ月となりました。会長就任時は1年半と歴が浅く、どうなることかと思いましたが、無事ここまでくることができ、胸を撫で下ろす思いです。

4月9日に高田 RAC で春イベントを主催したのですが、そのときのお話をさせていただきます。

高田 RAC は3年前より春イベントを主催し、継続行事の1つとなってきています。毎年違った内容で参加して下さった皆様をおもてなしております。今年の観桜会はどんな内容にするのか永井幹事と頭を悩ませたのですが、今年は高田の桜を存分に満喫してもらいたいと思い、「旧師団長官舎でお茶席」「高田城三重櫓見学」「懇親会のBBQ」に決定。

当日は参加者総勢30名と過去に例をみない大規模での開催となりました。「旧師団長官舎でお茶席」では初めての正式なお茶席ということもあり、ふだん出来ない体験ができたことととも皆様満足していました。その後、高田城三重櫓から見る景色を堪能し、懇親会として高田 RC 青少年奉仕委員飯塚様のお宅にてBBQを開催しました。親睦が深められたと感じる内容の濃いものとなりました。当日の天気はあいにくの雨模様だったのですが、参加して下さった皆様からご好評の声をいただき主催した側としてとても満足のいく行事となりました。

今期も残すところ僅かですが、今後とも高田 RAC へのご指導・ご鞭撻のほど宜しくお願い致します。



## ロータリーの友5月号より

P73 2016年7月2日国際ロータリー第2800地区  
クラブ奉仕グループセミナー基調講演要旨

上杉鷹山の訓え (学)九里学園高等学校教諭 遠藤 英

上杉鷹山(治憲、1751～1822)の改革の評価には、米沢藩が一丸となって取り組んだといったような表現が多いのですが、江戸時代としては非常に特殊なケースです。では、鷹山の改革がなぜ一丸となっていたのか、というのが本日のテーマです。

そういうことが可能となったのには土壌がありました。上杉氏は、1600年の関ヶ原の戦いで徳川と対決し、それまでの120万石を30万石に減らされ米沢へ転封となったのです。その時、武士全員には給料が払えなくなりました。家老の直江兼統(1560～1620)の判断で、下級武士たちには農業をさせ、自給自足の生活をさせます。

受けつぎて 国のつかさの身となれば

忘るまじきは 民の父母

という歌があります。これは鷹山が藩主になった時に、決意を詠んだ歌だと言われています。「殿様となった限りは、民の父母であるという心を絶対に忘れない」という意味です。

16歳でこういう言葉を口にできるのは、徹底的に儒学の教育を受けていたからです。儒学者・細井平洲(1728～1801)を中心に、複数の学者たちにより、鷹山はいわゆる帝王学をたたき込まれたのです。

(次号につづく)